

キューバとドミニカ共和国のスペイン語

ジョン・M・リップスキー
牛島 万 (訳)

Spanish of Cuba and the Dominican Republic

Takashi Ushijima*

This work is a Japanese translation of two chapters of John M. Lipski's Latin American Spanish: "Spanish of Cuba" and "Spanish of the Dominican Republic." Each chapter is composed of six parts: Historical overview, Extra-Hispanic linguistic influences, Phonetics and phonology, Morphological characteristics, Syntactic characteristics and Lexical characteristics. Currently in Japan, there are still few works related to Latin American Spanish. I therefore hope that this work will be a useful contribution, and that through Lipski's book, the influence of African and Spanish populations on Latin American Spanish, and the variety and consistency of Latin American Spanish will be better understood.

(*城西国際大学人文学部メディア文化学科・講師)

以下は、John M. Lipski, *Latin American Spanish* (Longman: New York, 1994) の第12章と第13章に限って翻訳したものである。同書で引用されている出典の詳細については割愛している。

1. キューバのスペイン語

■歴史概観

キューバのスペイン語方言は、ラテンアメリカの言語変種の中で最も幅広く研究されているものの一つである。キューバのアフロ・ヒスパニック系の言語要素は、クレオール化説とラテンアメリカ・スペイン語へのアフリカの影響説に顕著に現れている。米国に巨大なキューバ人コミュニティが存在しているために、ハバナやその他の大都市を中心とした音韻論・社会言語学・語彙論に関する多くの詳細な研究が発表されてきた。この事実とは裏腹に、キューバ・スペイン語の包括的な研究がいまだに発表されていない。しかし、言語地図は目下作成中である (García Riverón 1991)。部分的には、Alzola (1965)、Bachiller y Morales (1883)、Isbasescu (1968)、Montori (1916)、Salcines (1957) などの業績や、Alonso & Fernández (1977)、López Morales (1970) の論文がある。

コロンブスは最初の航海でキューバを訪れ、それとほぼ同じ時に少数の入植が始まった。キューバには金やその他の容易に獲得できる富が発見されなかったので、およそ1世紀の間、そこは停滞した地域であった。はじめて重要視されたキューバの町は、植民地としてすでに栄えていたエスパニョーラ島の近くの、キューバ島東端にあるサンティアゴ・デ・クーバであった。サンティアゴはキューバ最初の首都になり、この港を經由してサンクティ・スピリッツ、バヤモ、トリニダッドにある沖積層の砂金から抽出された少量の金が輸出された。

また、キューバは中米への数回に及ぶ探険の経由地としても利用されたが、ひとたび大陸が繁栄して自給自足が達成されると、経由地としてのキューバの重要性は急速に低下していった。スペインの厳重な政策は、入植者が植民地キューバ島を放棄しないように計画されたものだったが、多くの入植者が大陸へと移住していった。こうしてサンティアゴ・デ・クーバの重要性は下がり、これとは逆に、それまで重要ではなかったハバナ港が主要な役割を担うようになった。16世紀後半以来、スペインは年2度の定期便を新大陸 (ラス・アメリカス) へ送る制度を導入し、人や交易品を運び込み、財宝を持ち帰った。この船には護衛隊が便乗し、目的地の港には要塞が建設されたことから、この

制度は一部に、増え続ける海賊の襲撃に対する防御措置となった。一つの定期便はベラクルスに、もう一方はノンブレ・デ・ディオス（後のポルトベロ）に向かった。両定期便はスペインとの往復の際に、ハバナで停泊した（ハバナは元々の南海岸から北海岸に新たに建設されていた）。こうしてキューバ西部に大きな繁栄をもたらす一方で、キューバ東部は社会的・経済的低迷期に入り、そこから完全に抜け出すことは到底できなかったのである。

キューバ中央部の平地は牧畜に充てられ、乾燥肉や皮革を産出した。西部では砂糖、タバコ、後にコーヒーの栽培が始まった。キューバ中央部と東部の大部分は経済を支えるために密輸業に転じた。特にキューバ東部では言語的にも商業的にもカリブ海の島々とのつながりが強く、ハバナとの交流以上に重要なものだった。地政学的不均衡の影響が現代のキューバ・スペイン語に顕著に見られ、「東部出身者」の話し言葉は、ハバナのスペイン語よりもドミニカやプエルトリコのそれに類似している。

ほぼ18世紀のあいだ、キューバは貧窮した植民地ではなかったが、軽視された植民地であった。護送船団の重要性が減ったこととあいまって、カリブ海と大陸のあいだをくまなく通る交易ルートの拡張によって、ハバナは以前のような戦略的重要性を奪われた。しかも、スペインの重税の制度が重要な経済成長を抑制した。七年戦争の間の1762年にハバナはイギリスに占領され、それは約1年間続いた。この時期にキューバ人はイギリスやその植民地との自由貿易に恵まれ、スペイン体制下では決して享受できなかった経済的自由を味わった。言語学的に見て、このわずかな間の出来事が、スペイン植民地に突如としてコスモポリタニズムを導いた点で重要なことであった。

キューバの砂糖産業は、世界最大の砂糖生産地を崩壊させた、1791年のハイチ革命の煽りを受けた。多くのハイチの農園主たちはキューバへ逃れ、中には奴隷を連れてきた者もいた。そして、世界の砂糖価格の急上昇によって、キューバでは可能なかぎりの土地を積極的に砂糖収穫地に変えていった。砂糖生産は労働集約性が高く、急増する労働力のニーズに対応するため、キューバ人はかつてのスペイン領アンティル諸島では見られなかった規模で、アフリカ人奴隷の導入に踏み切った。その後100年間で約75万人の奴隷が導入された。そして、19世紀最初の四半世紀で、アフリカ人奴隷はキューバ人口全体の40%にまで達した。この数値に多くの自由黒人の人口を加えると、アフリカ人とアフロ・ヒスパニック系の人口はほぼ19世紀の間、総人口の半分を優に上回っていたことになる。ただし、その人口分布は均等ではなく、大都市ではスペイン本国人が占めていたが、地方の砂糖生産地域ではアフロ・ヒスパニック系の人口が非常に多かった。この人口推移が及ぼした言

語的影響は極めて大きく、キューバにおけるアフリカ人の存在に起因する十分な言語現象が活発な議論的になっている。この非常に多い自由黒人人口（統計的には、世界の奴隷保有領の中で最大と推計されている）は、一方でスペイン人やクリオーリョとの、他方で同化していないアフリカ人との言語的・文化的懸け橋になっていた。

また19世紀のキューバで重要であったことは、一部に、アフリカ人の存在の代わりに多くの白人が移住してきたことだった。フランス人のプランテーション経営者がやってきただけでなく、スペイン領アメリカの大半が植民地からの独立戦争の渦中にあつたので、キューバではスペイン王党派が殺到していた。この事実は、キューバで独立運動の進展が遅れた一因となった。スペインからの移民は特に19世紀後半に顕著で、中でもガリシア・アストゥリアス地方、カナリア諸島の出身者が目立った。カナリア諸島からの移民は20世紀最初の数十年間でピークに達し、二領域間に少なからず生じた言語転移の要因となった。スペインからの移民は極めて集中して入ってきたので、キューバ人はイベリア半島出身の全スペイン人を「ガリエゴ (gallego)」(‘ガリシア人’の意味)、カナリア諸島出身者を「イスレーニョ (isleño)」(‘島民’の意味)と称するようになった。1898年の米西戦争の頃、白人キューバ人のほぼ半数がスペイン生まれであった。そのため、キューバのスペイン語には他のラテンアメリカ・スペイン語方言よりもヨーロッパ的要素が多かったのである。

キューバのナショナリストはスペインからの独立を何度か企てたが、スペインとの公的関係が切れるのはまさに1898年の米西戦争のときであった。キューバは4年間、米国の軍事保護国下にあり、キューバ憲法のプラット条項修正によって、その後いかなる場合も米国が軍事的介入の権利を有するようになった。同修正は最終的に無効になったが、米国は今もキューバ東部のグアンタナモ湾に海軍基地の租借権を維持している。

民政と事実上の軍政の政権交替に苦しんだ末、フィデル・カストロ率いる革命勢力が1959年に権力の座に就いた。個人財産の即没収、共産主義への公式の移行、米国との敵対関係から生じる国内の反動によって、何十万人ものキューバ人が国外に脱出した。この最大の国外移住は1960年代半ばと1980年のマリエル・ボート輸送事件の時に起こった。そして、キューバからの亡命は現在まで続いている。大半のキューバ人は米国、特にマイアミやニューヨーク市に移住し、30年以上経た現在も、キューバ・スペイン語は米国でその持味を展開させている。「キューバ」のスペイン語に関する近年の研究は、米国内で居住する自国を離れた移民コミュニティを基盤に行われている。キューバ生まれの米国居住者の間では、英語使用が多いことを除けば、言語様式はキューバ人と大差はない

ようである。しかし、若年層のキューバ系米国人の第一言語は英語になりつつある。

■スペイン語以外の言語的影響

かつてキューバには多くの先住民が存在し、最初のスペイン人入植者は敵対攻撃を受けていた。アラワク族がその最大で、かつ最も組織化された集団であった。タイノ族は主にキューバ東部に住んでいた。いち早く知られるようになったのがシボネイ族で、アラワク族の侵略により、すでにキューバ西部へ追いやられていた。疫病や虐殺、そして先住民を強制的に奴隷にするという無謀な企てによって、まもなく多くの先住民人口が低減したが、その後次第に多数の語彙や文化的慣習がスペイン語の語彙項目に入ってしまった。このような語彙は、アンティル諸島にいた、新大陸と初めて接触を行なった最初の開拓民によって持ち込まれたため、キューバのみならずスペイン領アメリカ全域でも知られている。

すでに米西戦争以前から、米国がキューバにとって最大の貿易相手国であったので、キューバに対する米国の影響力は大きかった。キューバ産の砂糖とタバコは米国に出回り、また米国市民の姿がキューバのいたるところで見られた。キューバの独立後、米国人の存在はさらに大きくなった。多数の米国企業が、都市部、農村部を問わずキューバで事業を開始し、殺到するように多くのキューバ人が米国へ留学した。そして上流階層の間では英語ができることが重要なことであった。植民地以後まもないキューバで最も重要な役割を果たしたヘラルド・マチャード政権は親米派で、フルヘンシオ・バティスタの2度の政権も、またそのあいだのいくつかの体制も米国と緊密な関係を保っていた。この時期、米国人はビジネスや観光で何度もキューバを訪れており、米国企業の多くがキューバに広大な所有地を持っていたために、ビジネスや貿易に携わる教養のあるキューバ人は英語が多少できた。このため、キューバ人が特に野球やボクシングなど、米国のスポーツに熱中していたこととあいまって、その結果、多くの英語法が入ってきた。フィデル・カストロの反米体制と裏腹に、英語法は使用され、普及し続けている (Depestre Catony 1985)。

特に19世紀に直接アフリカから奴隷として大勢の人たちが連れてこられたために、キューバでは多くのアフリカ人が存在するが、このことは、キューバの土壌でアフリカ諸語の使用を復活させる結果となった。彼らの言語的痕跡は今日もなお残っている。 Yoruba 語はアフリカ系キューバの宗教儀式である「サンテリーア (santería)」や「ニャニゴス (ñānigos)」に関する言語基盤を提供した。一方、キコンゴ語やその他のバントゥ諸語の名残もキューバ中央部の孤立したいくつかの地域で今も見られる (García González 1974; García González & Valdés Acosta 1978; Granda 1973b; Valdés Acosta 1974)。(ボサルと呼ば

れる) アフリカ生まれのキューバ人は、20世紀に入るまで極めてアフリカ化したスペイン語ピジンを話し続けた。そこで、この非常に簡略化された話し言葉が、周縁化されたアフリカ系キューバ人の日常スペイン語につねに影響を与えていたと考えられる(Granda 1971; López Morales 1980b; Perl 1984, 1985; Ziegler 1981)。黒人労働者のなかには19世紀にキュラソー島からも売買されてきた者がいた。その際、彼らはアフロ・イベリア系クレオール語であるパピアメントをキューバに持ち込み、それをボサルの語彙目録に加えた。最終的に、キューバ全体の語彙項目は多数のアフリカ起源の語彙で豊かになった。中にはラテンアメリカ全域で見られるものもあれば、キューバという一地域に限定されるものもある(Ortiz 1924)。

19世紀半ばの数十年間、黒人奴隷廃止とその結果起こった、その代用としての労働力のニーズに対応するため、当初10万人以上の中国人がキューバに流入した。また、20世紀初頭の数十年間にはさらに別の中国人移民の波が押し寄せた。いずれの場合も、移住者は圧倒的に男性が多く、彼らはキューバ人女性と結婚した。後に、中国系キューバ人コミュニティが形成され、中国の言語や文化を維持する一方、スペイン語も話し、キューバの生活様式に親しんだ。キューバ革命後、ほとんどの中国系キューバ人は米国へ向かい、ニューヨークやマイアミに新たなコミュニティを形成した。中国系キューバ人の言語的痕跡は、「チャラーダ・チーナ(charada china)」(‘中国のことば当て遊び’)と呼ばれるキューバ式数字ゲームの他、中国人がスペイン語を話そうとするときのやや軽蔑的な一連の隠喩やものまねにあらわれていた。しかし、多くの中国語の語彙が一般のキューバ人にも知られるようになった(Varela 1980参照)。

■音声と音韻

キューバ・スペイン語の音声的特徴は他のカリブ方言にも共通する。キューバの発音に関する概説は、Almendros (1958)、Costa Sánchez (1976-77)、Espinosa (1935)、Haden & Marluck (1973)、Isbasescu (1965,1968)、Lamb (1968)、Rodríguez Herrera (1947)、Ruíz Hernández & Miyares Bermúdez (1984)、Salcines (1957)、Sosa (1974)、Trista & Valdés (1978)、Vallejo-Claros (1970) などがある。主な音声的特徴は以下の通りである。

- 1) /y/は強く、消失し難い。句頭に来ると時折破擦音になるが、他のカリブ方言に比べて破擦音の頻度はそれほど高くない(Saciuk 1980)。
- 2) /x/は弱い咽頭音[h]で、しばしば消失する。

- 3) 破擦音/č/はめったに脱破擦音化しない。Canfield (1981) は、初期にキューバでも脱破擦音化があったと述べているが、プエルトリコ、パナマ、アンダルシア西部ほど頻繁ではない。
- 4) 句末と語末の/n/は母音の前で常に軟口蓋音化する (Hammond 1979; Lipski 1986a; Terrell 1975; Uber 1984)。
- 5) ハバナでは、母音間の/p/ /t/ /k/の有声化が常に起こる (Guitart 1978, 1980)。
- 6) キューバ全域で/rr/はしばしば無声化する。これは「前氣息音化」といわれ、[h̃r]と表記される。実際の音は継続中たえず震えを伴うが、有声音の入りが遅いか、あるいは全くない。Vallejo-Claros (1970) のデータによると、この異音はキューバの多くの地域で社会言語学的汚辱を伴っている。/rr/の軟口蓋音化はキューバでは極めて珍しく (Cuéllar 1971)、最下層に限られ、地理的には中央部と東部の地方にしか分布しない。
- 7) 句末と語末の/l/と/r/の中和は、キューバの全スペイン語変種の特徴だが、実際の音声の現れは地方や社会文化的集団によって異なる。2種の流音のうち、特に句末で/l/の方が変化しにくい。句末の/l/の脱落はごくまれにしか起こらない。かつてこの音声変化は、スペイン語を完全に習得していないアフリカ生まれの元奴隷が話していたピジン化スペイン語と関連していた。むしろ句末の/r/の脱落の方がよく起こっているが、ハバナや中部地方の下層階層のあいだではかえって[l]への側音化が普通である。米国のキューバ人コミュニティでは、句末/r/の発音が、ハバナの専門職層である最初の移民集団と、1980年のマリエル・ボート輸送事件のときとそれ以後にやってきた移民（その中には、労働者階級の話者や中部農村地方の住民が多く含まれていた）との間の社会言語学的識別標識となっている。
- 8) 子音の前の流音も変異的に発音される。/r/ > [l] や /l/ > [r] のような単純な交替は可能性として最も少ない。ハバナの社会経済的下層のあいだでは、子音の前での流音のそり舌音化や声門音化がかなり日常的になっている。中央部の農村地域では、流音に後続する子音が促音化することが多い。例、puerta「扉」 > puetta、algo「あるもの」 > aggoなど (Costa Sánchez & Carrera Gómez 1980a, 1980b; García González 1980; Goodgall de Pruna 1970; Harris 1985; Ruíz Hernández & Miyares Bermúdez 1984; Terrell 1976; Uber 1986; Vallejo-Claros 1970)。現代のキューバでは、/r/と/l/が母音化してわたり音[l̩]になることはほとんどない。だが、19世紀の、「ネグロス・ク羅斯 (negros curros)」と呼ばれるスペイン語を第一言語として話すアフリカ系キュー

バ人の話し言葉にその典型が見られた (Bachiller y Morales 1883; Cruz 1974; García González 1980; Montori 1916)。しかしながら、この発音がアフリカ起源であるという証拠は何もない。本質的にアンダルシアの言葉である“curro”「ハンサムな」が示すように、アフリカ系キューバ人話者はアンダルシア風の発音を誇張して採り入れたのかも知れないからである。

- 9) 音節末と語末の/s/は弱化し、氣息音[h]になる。一方、休止前では完全に脱落することが多い (Guitart 1976; Hammond 1979, 1980; Lipski 1986a; Terrell 1979; Uber 1984)。
- 10) キューバでは、母音が弱化することも、それ以外の変容を被ることもほとんどない (Costa Sánchez 1977; Ruíz Hernández 1986)。形態論上の範疇を表示する場合でさえ、語末/s/が頻繁に弱化するので、多くの研究は、キューバ・スペイン語にも東部アンダルシア・スペイン語方言とよく似た母音緩慢化規則があり、語末の/s/の音韻痕跡を実際に生み出しているかどうかに向けられてきた (例えば、Rosario 1962による説)。しかし、スペクトログラフを用いた研究や心理言語学的研究 (Clegg 1967; Hammond 1978; López Morales 1979) によって、その規則は適用されないことが実証された。個人語のレベルでは、/s/の脱落による音声的代償が、特に母音延長という形で発生する場合がある (Núñez Cedeño 1987b, 1988a)。

■形態的特徴

- 1) キューバ・スペイン語は親称の代名詞として一律に tú を用いる。現代の用法では、他のスペイン語方言ならむしろ usted が使われるような初対面の場合でも tú の使用が拡大している。
- 2) 昔のキューバでは、vos 使用の地域が所々に点在していた (López Morales 1965)。これに呼応する動詞形は二重母音を保持していた (hablá[s]; comé[s])。これがアンティル諸島における vos 使用の最後の痕跡である。
- 3) コロンビアやコスタリカの方言と同様に、キューバのスペイン語は/t/か/d/で終わる語幹に付く示小辞に -ico を好んで用いる。例、ratico「しばらくの間」、momentico「ほんの少しの間」、chiquitico「とても小さい(子供)」など。
- 4) 地名から派生する多くの接尾辞は、スペイン語諸国で様々な変異形が認められるが、キューバでは -ero である。例、habanero「ハバナの」、santiaguero「サンティアゴの」、guantanamero「グアンタナモの」、matancero「マタンサスの」(Pérez González 1980 参照)。

■統語的特徴

1) 非倒置のWH疑問文は、主語が代名詞の時に原則となる。

¿Qué tú quieres? 「君は何がほしいの。」

¿Cómo usted se llama? 「あなたの名前は何かですか。」

概してキューバ人にとって、主語代名詞を動詞の後に置くことは挑戦的あるいは横柄な口調の時である。

2) más nunca 「二度と～ない」、más nada 「他に～ない」、más nadie 「他に誰も～ない」のような組合せに見るように、másは否定辞の前に置かれる。

3) キューバ・スペイン語には、不定詞の語彙的主語がよく現れる。そして、くだけた会話で para を用いる場合、接続法構文はまず使用されない。

¿Qué tú me recomiendas para yo entender la lingüística? 「私が言語学を理解するために、君は何を私に勧めますか。」

■語彙的特徴

キューバの基本語彙は本来のスペイン語から構成されるが、植民地時代のキューバは中心的位置にあったため、ラテンアメリカ全般に見られる語彙的改新の多くがキューバ・スペイン語に影響した。その結果、キューバにしかない語彙の数は少ないが、ラテンアメリカ・スペイン語の新語の多くはキューバを発祥地としている。アラワク語（時にはタイノ語）からはカリブ全域で使用される bohío 「小屋」、batey 「住居の敷地」（現代スペイン語話者によって、「家のまわりの庭」の意味で用いられる）、caimán 「ワニ」、colibrí 「ハチドリ」、cocuyo 「ホタル」などが入った。Valdés Bernal (1980) は、主に動植物関係で擬態音に基づくと考えられる先住民起源の語彙をいくつか取り上げている。López Morales (1970a, 1970b) は、アメリカ本土からキューバに逆輸入された語も含めて、キューバ・スペイン語の土着アメリカ語彙を広く扱っている。その他、キューバ語彙の資料としては、Dihigo (1928-)、Dubsky (1977)、Entralgo (1941)、Espina Pérez (1972)、Macías (1885)、Ortiz (1974)、Paz Pérez (1988)、Pichardo (1836)、Rodríguez Herrera (1958-9)、Sánchez Boudy (1978-)、Santiesteban (1982)、Suárez (1921) などがある。キューバ人も国外の研究者も共に典型的なキューバ語彙として認識しているものに次のものがある。

(arroz) congri 「黒豆で作った料理とそれを用いたご飯料理」、bandalao 「アフリカ系

キューバ宗教儀式の司祭」、bitongo「裕福で甘やかされた」、Biyaya「たいへん頭の良い」、de botella「ただで」(cf. pedir botella「ヒッチハイクする」)、dar cañona「狡い手を使う、車を乱暴に運転する」、chucho「電灯のスイッチ」、fajarse「戦う」、fotuto「クラクション」、estar en la fuácata「非常に貧しい、一文無し」、guajiro「小作農」、jimaguas「双子」、juyuyo「たいへん豊富な」、lucirle a uno「～のように見える、思われる」、máquina「車」、ñángara「共産主義者」、picú[d]o「自惚れた、けばけばしい」、piscorre「ミニバン、ステーション・ワゴン」

2. ドミニカ共和国のスペイン語

■歴史概観

ドミニカ共和国のスペイン語は隣接するアンティル諸島、とりわけプエルトリコのそれと共通点が多い。ドミニカ共和国の言語発達は、スペインの新大陸への正面玄関から植民地の僻地へと急激な変貌を遂げたサントドミンゴの歴史と関連している。Henríquez Ureña (1940) と Jiménez Sabater (1975) は、ドミニカ・スペイン語に関する最も網羅的な研究だが、発音や語彙を扱った専門書もいくつかある。Alba (1990a)、Benavides (1985)、Megenny (1990a) もドミニカの方言学を幅広い観点から網羅している。また、Granda (1986) は多くの役立つ文献を提示している。

エスパニョーラ島はコロンブスが最初の航海で到着した場所で、その北海岸に彼は少数の入植者を残した。2度目の航海で彼がラナビダーに戻って来た時には、その住民全員が死亡していた。コロンブスは2度目の航海で約千人の入植者を連れてきた。彼はさらにその東にイサベラという村を建設し、そこを弟のバルトロメロに任せた。しかし、土着のタイノ族の攻撃と内部抗争で植民地が荒廃したので、バルトロメロはそこを離れて、島の南岸にヌエバ・イサベラ（後のサントドミンゴ）を建設した。やがて、この町はニコラス・デ・オバンド総督の下でカリブ海域の最も重要な植民市となったが、そのオバンドは、すでに発見されていた小金鉱のために土着民の労働力を徴集しようとした。スペイン政府はエンコミエンダ制の導入を企てたが、タイノ族がこれに服従しなかったため、この計画は失敗に終わった。プエルトリコと同様、ドミニカの金床も瞬間に掘り尽くされた。そこで、入植者たちはメキシコやペルーでの巨大な富の発見に惹かれ、アンティル諸島から去って行った。残留した入植者の大半は牧畜業や砂糖栽培に従事する農民だったが、サントドミンゴは戦略的に置かれた港としてその後も発展し続

けた。

スペイン人のエスパニョーラ島に対する関心が減るにつれて、植民地の経済状況も悪化した。さらに島の西部をめぐるフランスとイギリスの抗争が問題を大きくした。18世紀の間、スペインはカナリア諸島から多くの入植者を送り込み、フランスの侵入に対する防衛線を維持した。西部農村地域や首都にいた、かなり多くのカナリア諸島出身者の存在から、ドミニカ・スペイン語のいくつかの特徴、特に非倒置疑問文の多用を説明できる。最終的に、フランス人は島の西端を支配し、サンドマングという豊かな植民地を建設した。その経済はもっぱら砂糖栽培を基盤とし、アフリカ人奴隷が総人口の90%も占めていた。

アフリカ人奴隷の数はフランス植民地ほど多くなかったが、スペイン領サントドミンゴでは重要な存在であった。19世紀初頭、キューバやプエルトリコに影響を与えた砂糖プランテーション・ブームはサントドミンゴであまり重視されなかった。なぜなら、ハイチ暴動の影響があまりにも身近で起こったので、隣接の植民地を崩壊させた体制を模倣することに対して躊躇したのは当然だったからである。この懸念は根拠のないことではなかった。現に、ハイチ革命が終わってから数年後、ハイチのトゥサン・ルヴェルチュールがこのスペイン植民地に侵入して征服したのである。次いで、ナポレオンがルクレールの指揮下で自らの軍隊を送り、ハイチ人を征服した。しかし、サントドミンゴは1809年までフランスの支配下にあったが、イギリスの援助によってフランス人を追放した。1821年のドミニカ共和国独立に合わせて、ハイチ大統領ジャン・ピエール・ボワイエの援助が始まったが、ハイチは結局ドミニカを占領し、1822年から1844年までの間、後のドミニカ共和国を支配した。フランスが独立を公認する代償として、ハイチが元のフランス人地主に支払いを余儀なくされた法外な補償金を調達するために、特に増税が実施されて以来、スペイン領ドミニカ人はハイチ人の支配に苛立ちを感じていた。ドミニカ軍は1844年について決起し、この激しい戦闘の末にドミニカ共和国が誕生した。以来、ハイチとドミニカ共和国は侵略と反侵略、そして交戦の歴史を共有することになった。

数年後、ドミニカの指導者たちは自国をスペインないしは米国に併合しようとした。事実、1861年には再びスペインの支配下に入り、4年間、ドミニカ共和国はスペインの保護国となった。その間はスペインからの入植者が殺到し、旧植民地勢力の経済的要求に曝された。しかし、2度目のスペイン支配を終結させるために再び戦争が必要だったが、これをもって問題は解決されなかった。ドミニカ共和国は相次ぐ独裁制に苦しみ、1930年から1961年にかけて絶対的支配を実現したトルヒーリョ体制をもってピークに達した。ドミニカ共和国は政治的にも財政的にも分裂状態に陥った結果として、1899年から1916年をかけ

て米国の事実上の支配下に入り、1916年から1924年にかけては実際に米国軍に占領された。これ以降、ドミニカ経済は換金作物を中心に回復し、砂糖が主要作物になった。また観光業もドミニカ経済の発展を支える重要な要因で、首都だけでなく、かつては孤立していた北部海岸地域までもが世界で高い評価を受けるようになった。

■スペイン語以外の言語的影響

他のアンティル諸島と同様、ドミニカ共和国のスペイン人は先住民のタイノ＝アラワク族から多くの語彙を吸収した。いくつかの地名を除けば、当該語彙は他のカリブ海域でも通用し、その多くがラテンアメリカ全域でも通用する。

ドミニカ文化に及ぼしたアフリカの影響こそが、スペイン以外の影響の中で最も重要だ。キューバや、それより小規模なプエルトリコの場合と違って、ドミニカ共和国では19世紀に入る頃には、黒人奴隷の導入に対する要求の高まりは見られなかった。ほとんどのアフリカ系ドミニカ人の文化的・言語的ルーツはさらに昔に遡り、このような集団は長い間スペイン語を話してきたので、ほんのわずかなアフリカ起源の語彙が見られる程度である。よく耳にするアフリカ系ドミニカ語彙の中で、他のカリブ方言でも使用されるものとして、changa / congo (ダンスの一種)、fucú「悪霊、不幸」、quandú[ɪ]「小さい緑豆」、mandinga「悪魔、不幸」、busú「不幸」、banquini「亡くなった子供のための葬儀」、mangulina (民族音楽の一種)、quimbamba「遠くに」などがあり、地名としてマンディンガ (Mandinga)、レンバ (Lemba)、サマンガラ (Samangola)、サペ (Zape) などがある (Megenny 1982 1990a; Deive 1978)。

ドミニカ・スペイン語に与えたハイチ・クレオール語の影響は、概して国境付近の農村地方と砂糖プランテーション (batey) での生活に限定され、労働力の大半がハイチから集められている。サマナ半島では、多くの住民が局地的にしか通用しないクレオール語、すなわち俚語を話しており、食物や植物関係のハイチの語彙が局地的方言に入っていることもある。また、米国から来た奴隷の子孫にあたる英語話者も見られるが、彼らは、ハイチがドミニカ共和国を占領していたとき、何度か植民地化しようとしてサマナ半島に入植させられた人々だ (De Bose 1983; Poplack & Sankoff 1987)。明らかに、西インド諸島の英語変種の話者もサマナ半島にやってきて、これら全ての英語諸形態が局地的なスペイン語方言に影響を及ぼした。このスペイン語方言は今も高齢者層の第二言語である。

■音声と音韻

ドミニカ共和国は、概して語末子音の発音の仕方によって、少なくとも3方言地域に区分できる (Canfield 1981は4区域を提案している)。第一は北部のシバオ地方で、この話し言葉はドミニカの文学や民間伝承のなかの典型的な言葉である。第二は首都サントドミンゴ周辺地域である。第三は島の最東端である。他にもう一つ方言区域を挙げるなら、サントドミンゴのちょうど北に位置するピヤ・メヤのようなアフロ・ヒスパニック系の孤立した地域やいくつかの内陸地方であろう (Meggenney 1990a)。サマナ半島や内陸部の大部分で見られるハイチ・クレオール話者と同様に、サマナ半島のスペイン語・英語二言語話者もいくぶん異なる音韻様式の一因になっている。ドミニカの発音に関する詳細な説明には、Alba (1990a)、Benavides (1985)、Henríquez Ureña (1940)、Jiménez Sabater (1975)、Jorge Morel (1974)、Núñez Cedeño (1980) などがある。主な特徴として次の例がある。

- 1) 後部摩擦音/x/は弱い氣息音となる。
- 2) /y/は強く、句頭で破擦音になることが多い (Jiménez Sabater 1974; Jorge Morel 1974)。
- 3) 破擦音/č/の調音位置は中部硬口蓋から前部硬口蓋まで幅があるが、一般には閉鎖音の要素が残る (Jiménez Sabater 1975)。
- 4) 母音間の/d/はあらゆる社会方言や地域方言で規則的に脱落する。唯一の例外は、/d/>[r]の変化がより頻繁に見られるアフロ・ヒスパニック系の要素が強い孤立方言群に見られる。これは、ピヤ・メヤ (Jiménez Sabater 1975; Núñez Cedeño 1982, 1987a) や他のアフロ・ヒスパニック系共同体 (Meggenney 1990a) の話し言葉において典型的である。/d/を[r]として発音するのは、少なくとも1世紀半前から聞かれた (Granda 1987)。
- 5) 母音の前に来る句末や語末の/n/は軟口蓋音化するか、あるいは脱落する。/n/の軟口蓋音化は非軟口蓋子音の前でもよく起こる (Jiménez Sabater 1975; Jorge Morel 1974; Hache de Yunén 1982; Núñez Cedeño 1980)。
- 6) 多顫動音の/rr/は、一部分ないしは完全に無声化するか、「前有氣音化」する。プエルトリコに見られるような軟口蓋音化はほとんどない (Henríquez Ureña 1940; Jiménez Sabater 1975; Jorge Morel 1974; Navarro Tomás 1956)。
- 7) ドミニカ・スペイン語の音節末と語末の/s/は、氣息音化するか、あるいは、それ以上に脱落することが多い。教養のある話者でも、語末や句末の/s/脱落の割合はほぼ絶対的といえるほどに高い (Alba 1982; Núñez Cedeño 1980)。このことは音韻再構造

化の始まりを引き起こし、hablar fisno[<fino]「気取った話し方をする」のような嘲笑的表現に例示されるように、余分な[s]の挿入を伴った過剰修正が異常なほど頻繁に起こりやすくなる (Núñez Cedeño 1986, 1988; Terrell 1982, 1986)。

- 8) ドミニカ共和国では、音節末の/l/と/r/の発音にも社会階層差や地域差がある。日常語レベルでは、ある種の中和がよく起こるが、実際の発音は多様である (Jiménez Sabater 1986参照)。/r/の方が変化しやすいが、/l/も多くの文脈で弱化することが多い。首都では子音の前で/r/と/l/が中和して[l]で現れるのが一般的だが、これは社会経済的下層のあいだにしか見られない (Núñez Cedeño 1980; Jorge Morel 1974)。González (1989)によると、首都の若年層のあいだで、/r/ /l/の脱落は側音化よりも多くなりつつある。ドミニカの東端では後続子音の促音化が多くなるが、/l/ /r/が句末に立つと消失が起こる。ドミニカ共和国各地で確認されているその他の変異形には、[h]への氣息音化、軟口蓋鼻音として表記されることもある鼻音化した氣息音 (特に、virgen[vihɲen]「処女」という単語において)、後続子音との融合の結果生じる多様なそり舌音などがある (Jiménez Sabater 1975)。北西部のシバオ地方では、音節末の流音が母音化し、わたり音の[ɨ]になる (algo[aɨgo])「あるもの」、mujer[muhej]「女性」) 日常語レベルでは、この現象がドミニカ共和国の北半分のほとんどで見られる (Jiménez Sabater 1975)。この現象の原因についてはまだ十分に解明されていない。Golibert (1976)は、流音の母音化がカナリア諸島起源だと考えているが、この発音は現在のカナリア諸島のスペイン語でほとんど聞かれることはない。Meggeney (1990a)はこの同じ発音がアフリカ起源であると指摘している。しかし、この現象が見られるラテンアメリカ地域が他にほとんどない。19世紀のプエルトリコの「ヒバロ (jíbaro)」の口語にこの特徴があったようだが、今日のあらゆるプエルトリコ方言にはない (Álvarez Nazario 1990)。19世紀キューバの「ネグロス・クーロス」という特徴的な話し方をするハバナ在住の自由黒人の間にも流音の母音化が伝播していたが (Bachiller y Morales 1883; Ortiz 1986)、それはアフロ・ヒスパニックというよりもむしろアンダルシアの話し方と関連していた。したがって、今日ではわずかな狭い地域でしか聞かれなくなった流音の母音化が、かつては多くのスペイン語使用地域で一般的だった可能性がある。Granda (1991)は、カリブ地域の流母音が基層語の影響ではなく、主として社会言語的周縁性に起因すると考えている。

現代ドミニカ共和国において、シバオ地方の人々 (cibaño) の流母音は社会言語学的汚辱を伴うため減退してきており、もはや農村地域でしか聞かれなくなってい

る (Alba 1988; Coupal et al.1988; Jiménez Sabater 1986; 別の観点ではPérez Guerra 1991参照)。母音化は、流音の中和 (主に[l]への融合か後続子音の促音化) という別の形に取って代わりつつある。シバオ地方の流音の母音化は、全ての子音の前と強勢母音が後続する休止の前で起こる (例、mujer[muhéj])。最終音節の母音に強勢がなければ、流音は句末で脱落する (árbol[ájβo]「木」)。語末流音に語頭母音が後続し、しかもその流音が主語代名詞のような独立した統語構成素に属している場合に母音化が起こる (例、él habla[ej aβla]「彼は話す」)。しかし、流音が接辞の一部を構成する場合は上記のかぎりではない (例、el habla [el aβla]「言葉」) (Alba 1979; Guitart 1981, 1988; Harris 1983; Rojas 1982)。

■形態的特徴

- 1) 強勢母音で終わる語 (これは本来のスペイン語語彙には見られない) の複数形は、標準語なら -es か -s を付けるが、多くの中南米方言の民衆語では -ses が付く。例、cafeses (cafés)「コーヒー」、manises (manías)「ピーナッツ」、papases (papás)「父、両親」など。ドミニカ共和国のいくつかの地域では、この現象が無強勢母音や子音で終わる語にまで及んでいる。例、casa-cásase「家/家々」、mujer-mujérese「女性/女性たち」など (Jiménez Sabater 1975)。単数形の音韻侵食が生じて、原形とはまったく異なる複数ができる場合もある。例、barbudos>barbuse「髭の男」(Harris 1983)。
- 2) 内陸部の農村地方では、主節に立つ直説法動詞が接続法に置き換えられることがある。ただし、この用法は個人語レベルにおいてでさえも変異性があり、規則的なものではない。Henríquez Ureña (1940) の主張によると、この変化は1人称単数形で/g/を追加する不規則動詞だけに限られ、そのような動詞の1人称複数形にしか起こらない。例、tenemos>tengamos「私たちは持つ」、venimos>vengamos「私たちは来る」など。事実、この変化が起こるのは主に北部地方に限定されるが、影響を受ける動詞の範囲は広がる。原則的にはどの動詞でも置き換えられるのだが、常に1人称複数形の場合だけに限る (Jiménez Sabater 1975; Meggenney 1990a)。
- 3) 概してドミニカ人は、改まった話し方においても2人称単数形を表示する/s/を脱落させる。Jiménez Sabater (1977,1978) は、fuera(s)「serの接続法過去形」が頻繁に縮約されてfuaとなることに言及している。

■統語的特徴

- 1) ドミニカ・スペイン語では、冗語的な主語代名詞がよく用いられる (Benavides 1985; Jiménez Sabater 1975 : 164-5, 1977, 1978)。

Cuando tú acabe tú me avisa.

「終わったら私に知らせなさい。」

例えば過去形の場合のように、呼応する動詞形が1人称や3人称と形態論的に区別されている時でもこの主語代名詞があらわれる。日常語レベルのドミニカ・スペイン語では、無生物名詞にも顕在的主語代名詞が用いられる。これは他のスペイン語方言には見られない。

Cómprela ... que ella son bonita.

「それら (=las piñas) を買いなさい。それらはきれいだよ。」 (Jiménez Sabater 1978)

- 2) Jiménez Sabater (1977, 1978) によると、無生物の場合にも顕在的主語代名詞の使用を拡大することは、存在文や外位置文における本来のゼロ虚辞ではなく、ドミニカ特有の *ello* の用法が元になっている (Henríquez Ureña 1939)。

Ello hay maíz.

「トウモロコシがある。」

Ello hay que parar con eso.

「そこで止まらなければならない。」

Ello es fácil llegar.

「そこに着くのは簡単だ。」

他のスペイン語方言にもある組合せだが、質問の応答として *ello sí / no* がよく使われる。しかし、ドミニカに特有な点は、単独形で *ello* を用いて見込みの可能性の程度を表すことだ (Henríquez Ureña 1939)。最近では、冗語的主語に代わるこの *ello* の用法は、ドミニカ共和国北部に限られている (Jiménez Sabater 1975)。

- 3) Henríquez Ureña (1940) によると、物語体で定動詞に前接代名詞を付けて用いられる (例、*llega y dícele* 「彼が到着し、彼(女)に話す」) が、この用法はほとんど見

られなくなり、高齢者層の話者が物語を語る時にしか聞かれない。

- 4) ドミニカ・スペイン語は、¿Qué tú quieres? 「何が欲しいの」のような主語代名詞を含むWH-疑問文の非倒置語順を保持している (Jiménez Sabater 1975; Núñez Cedeño 1977)。
- 5) 不定詞の明示的前置主語はドミニカ・スペイン語では一般的である (Henríquez Ureña 1940; Jiménez Sabater 1975)。主語代名詞は言うまでもなく、長い名詞句さえ主語として明示される。時折この用法は現在分詞や過去分詞にまで及ぶことがある (Henríquez Ureña 1940)。

Después de tú ido 「君が去った後で」

en yo llegando 「私が到着しようとする間に」

- 6) 重複的に後置される *no* (例、*nosotros no vamos no*. 「私たちは行かない」) は、ラテンアメリカの他の地域でも時折見られるが、ドミニカの口語スペイン語では極めて頻繁にあらわれる (Benavides 1985; Jiménez Sabater 1975)。これはブラジル・ポルトガル語の場合と同様、アフリカの影響が及んだ可能性がある。
- 7) 多くの農村地域、特に「バテイ」と呼ばれる砂糖プランテーションでは、古語的な呼称形 *su merced* (貴殿) が今だ使用されている。この用法は、社会的に目上の人に対する改まった発話に限ったものではなく、仲間同士 (*compadres*) のあいだでの敬意と親愛の両方の気持ちを表しているといえよう (Pérez Guerra 1988, 1989)。

■語彙的特徴

ドミニカ語彙の主な研究には、Brito (1930)、Deive (1986)、González Grullón et al. (1981)、Olivier (1967)、Patín Maceo (1947)、Rodríguez Demorizi (1975, 1983) などがある。ドミニカ・スペイン語は、他のアンティル諸島にもあるタイノ=アラワク語彙を共有している。Tejera (1951) は、多くの地名も含め、ドミニカの語彙項目における先住民要素について調査した。ドミニカでは、*china* 「甘いオレンジ」と *habichuela* 「赤豆」という語がプエルトリコと共通する。その他の典型的なドミニカの語彙として次のものがある。

busú 「不幸」、*cocoro / cocolo* 「黒人、東アンティル諸島の (英語を話す) 土着人」 (Camaño de Fernandez 1976)、*fucú* 「悪霊、不幸」、*guandú*(1) 「小さな緑豆」、*mangú*

「潰したバナナで作った料理」、*mangulina* (民謡の一種)、*mañé* 「ハイチ人」(蔑称)、*mofongo* 「肉と潰したバナナで作った料理」、*tutumpote* 「裕福な権力者」(初期トルヒーリョ体制の時に彼が用いた語) (Díaz Díaz 1987: 41-51参照)